

エッセー

全学共通カリキュラムの想い出

社会学部現代社会学科特別専任教授 水上 徹男

全学共通カリキュラム（以下、全カリ）への私のかかわりについて、ふりかえってみます。私は2002年に社会学部と独立大学院異文化コミュニケーション研究科の専任教員として赴任しました。着任初年度から、全カリの授業「社会科学演習」を担当させていただきました。その当時、学部の授業は受講生が300名以上でしたが、全カリで受け持った授業は数名のみで、大学院のゼミを除くと、それまでに授業を担当したグリフィス大学、モナシュ大学、兵庫教育大学を含めて、もっともこじんまりとした授業でした。その後も講義担当はありましたが、委員会を含めて、全カリにかかわる機会は限られていました。しかしながら、2018年に全カリ部長を拝命しました。

前任者の佐々木一也先生には、丁寧に引き継ぎをさせていただきました。また、春季休業中に『立教大学〈全カリ〉のすべて：リベラルアーツの再構築』（2001）を読んだり、Webで調べたり、周囲の方々からお話を伺ったりして情報収集に努めました。しかし、はじめての部長職という立場での戸惑いもあり、当時の全カリ教職員の皆様にはご苦労をおかけしました。当初は2年任期の予定でしたが、所属する社会学部の事情もあり、結果として1年で担当を終えることとなりました。十分にお役に立てないまま任期を終えるかたちになり、これからという時期であっただけに、今なお心苦しい思いですが、周囲の皆様にも寛容に支えていただけましたこと、深謝しております。この経験を通じて多くを学ぶことができました。

2018年には、全カリが主催した公開シンポジウム『「全カリ」の意義と役割を改めて考える』がありました。1997年に「全学共通カリキュラム」が導入されてから20年以上が経過、社会環境や高等教育を取り巻く状況が変化するなかで、全カリを見直す意義深い企画でした。登壇者は、郭洋春先生（当時立教大学総長／経済学部教授）、佐々木一也先生（当時前全学共通カリキュラム運営センター部長／文学部教授）と私でした。全カリの歴史や理念などを再確認する場となっただけでなく、郭先生や佐々木先生が示唆に富んだお話をされていたシンポジウムの熱気をいまでも覚えています。郭先生は「目指すところは、専門分野と全カリによる教養の融合によって多角的な人間をつくり出すこと」など、佐々木先生は「全カリ運営センターは学部間のネットワークの中心的な役割を担い、教育革新の運動体としても機能」していることなどを述べていました。現在でも大切な役割や機能として展開されています。

私は現在、立教セカンドステージ大学（RSSC）の運営委員長として、全学共通カリキュラム運営センターには未だにお世話になっています。RSSCの受講生と学部生が一緒に授業は、異世代共学としても多方面から注目されてきました。RSSCには毎日国内外か

らの取材依頼があります。立場はわかりましたが、全カリも RSSC も本学が世界に誇る取り組みであり、今後も多様なネットワークや連携のもとに継承、発展し、一層充実した教育システムとなりますことを期待しています。あわせて本学のさらなる進化と発展に寄与することを願っています。

みづかみ てつお